



富士山の美しい森の再生と 地域の活性化を目指して ——「富士山の森づくり」推進協議会

🌿 ボランティアによる植林活動：ブナ、ミズナラ、カエデなどの付近の天然林に多いものを植林



目標とする森のイメージについて語る副会長の清藤城宏さん。

🌿 森をささえよう

🌿 森と暮らそう

「富士山の森づくり」プロジェクトは、富士山の病虫害により樹木が大量枯死した地域に植林を行ない早期再生させることを目指し、財団法人オイスカが山梨県や複数の企業・団体と協働してスタートさせた事業です。これを進めるに当たり、多くの人に森林の重要性に関心を持ってもらい、森づくりのノウハウを関係者が共有し広く普及していくことを目的に、平成19年、「富士山の森づくり」推進協議会が発会し、本年3月、フォレスト・サポーターズに登録しました。

古くから日本人の心ふるさととして親しまれてきた富士山。その富士山の美しい景観と環境を支えているのが森林です。ところが、平成14年、富士山の西側、標高1600メートル付近のシラベの人工林が、トウヒツツリハマキという病害虫により大量に枯死するという被害を受けました。被害は100ヘクタールにも及び、そのまま放置すれば被害が拡大するという懸念から、山梨県は激害地で被害木を伐採除去し、カラマツ・ミズナラなどを植林しました。また、被害の少ない場所は列状間伐し、針広混交林への天然更新を促す事業を開始しました。天然更新だけに任せると森林再生では時間がかかり、その間

に土壌浸食や土砂流出を招きかねません。付近の天然林で採取した種から苗木を育て植林することで、再生を早めることができます。

そのころ、ちよつと複数の企業から財団法人オイスカに対して「森林ボランティアの活動フィールドを探しているが、良い場所がないか」と問い合わせが来ており、富士山の森は格好のフィールドとなる可能性がありました。しかし、対象地域は100ヘクタールという広さであり、それぞれの団体が独自に植林活動を行ったのでは、目指す森林の姿が異なり、統一した森づくりを行なうことができなくなります。こうしたことから、東京電力株式会社及び財団法人オイ

シカの被害を避けるため「ウッドガード」を設置

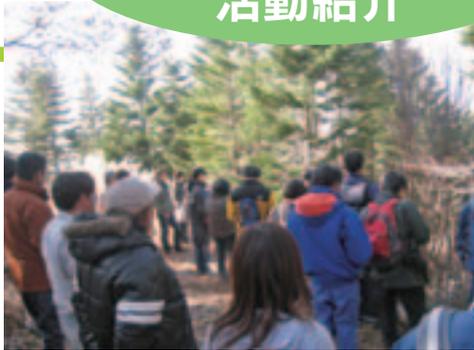


専門部会：チーム毎に広報や技術について検討



協議会の総会：参加団体が1年間の活動報告に基づき協議

フォレスト・サポーターズ 4つのアクション 活動紹介



参加団体などから集まったボランティア



多くの参加者が集まる野外勉強会：モニタリング調査などを実施

今日からやろう！森のための 4つのアクション

森にふれよう

木をつかおう

スガが発起人となり、樹種の選択や植栽方法などを検討し基準を設けるとともに、企業、団体、行政、研究者、地元林業従事者らが協働して森づくりを行なっていくために、平成19年「富士山の森づくり」推進協議会が立ち上げられました。

協議会では、毎年総会を開催し、1年間の活動報告に基づいて活動の検証および次年度以降に向けた協議を行ないます。また、専門部会を設置し自主的なチームにより、広報や技術などの分野別の討論を行います。

植栽する樹種は、付近の天然林に多いものの中からブナ、ミズナラ、カエデ、ヤマハンノキ、ヤマザクラの5種類を選択。植栽方法は付近の天然林に近いイメージで、1ヘクタール当たり約1000本をランダムに植えています。その際地表の掻き起こしを行い、天然木の種子の発芽を促すことで、天然更新による天然木との共存も狙っています。また、植える際はシカの被害を防ぐため、生分解性のウッドガードを使用して苗木を保護しています。毎年5、6月に、協議会に参加する企業・団体から

ボランティアを募り、1企業・団体が約1ヘクタールの面積を森林組合などの指導を受けて植林してきました。平成21年度までに延べ3000人以上が参加し、約25000本の植林を行いました。また、毎年7月頃には、植林地でモニタリング調査などを実施する野外勉強会も行ってきました。

このように、森林再生には研究に基づく実施計画とプロの技術が必要であり、ボランティアの思いだけで成し遂げられるものではありません。「富士山の森づくり」プロジェクトでは、森林再生を地域で働く森林従事者の力と技術を借りて行なうことにより、新たな雇用が創出され、また山村とボランティアの交流が増えることにより、「富士山の森づくり」が地域の活性化にも繋がってきています。

来年は国際森林年です。「富士山の森づくり」推進協議会では、協議会方式に基づく合意形成と検証による森づくりを進めてきました。この成果を富士山だけにとどまらず、全国で森づくりに取り組む人々の間にも広げていきたいと協議会では考えています。